

長野県ササ類地図 (8)
長野県北西部のササ類相

三樹 和博*

はじめに

長野県の御嶽山がタイプ標本産地でもあるササ属チマキザサ節のシナノザサ（クマイザサ）*Sasa senanensis* (Franch. et Sav.) Rehder だが、御嶽山周辺ではアマギザサ（イブキザサ）節のミヤマクマザサ *S. hayatae* Makino が広く分布しており、チマキザサ節の種の分布は高標高地の一部に限られている（三樹 2017）。それに対して大町市以北の地域では、北へ行くほど積雪量が増大し、大町市北部の佐野坂峠以北では、日本海要素に含まれる植物種の分布割合も増し、シナノザサなどのチマキザサ節の種の分布も多く確認されている（清水 1997）。またこの地域では、標高 800 m を境界として、日本海要素のチシマザサ *S. kurilensis* (Rupr.) Makino et Shibata と太平洋側の植物であるスズダケ *Sasamorpho borealis* (Hack.) Makino et Shibata の分布が接して分布することもあるとされている（清水 1997）。しかし、本調査ではスズダケ属やメダケ属をはじめ、ササ属のアマギザサ（イブキザサ）節やミヤコザサ節などの種は確認できなかった。よって、本調査で確認したササ類は、低標高エリアでは、ほぼチマキザサ節の種のみであり、中でもシナノザサの分布割合が卓越していた。一方、山地帯での標高差に対応した分布として、標高 1000 m 前後の標高帯において、チマキザサ節からチシマザサ節の分布域へと移行しているのを確認した。合わせて本調査では、チマキザサ節で確認された形態変異についても議論した。

調査地域と方法

ルート 1（大町市の鷹狩山を起点に、大町市北部の中山高原を経由し、美麻の権現山北麓を通り青木湖に至る：図 1-①）と、ルート 2（白馬村を通る国道 148 号線と、それに交差する村道や農道などを含めた道路を北上し、小谷村との境界付近まで：図 1-②）の道路沿いに出現する群落の中から、相互に距離を置いた同一クローン由来の可能性の低い

と推測される群落をランダムに選び、確認した種を記録した。また白馬村内を流れる松川沿いに西へ高度を上げていき、標高 1250 m の猿倉荘までの間（図 1-③）に現れた種を記録した。調査は 2021 年 10 月 19,20 日に行った。小林（2017）に基づき同定を行ったが、それよりやや広く種の形質を求めたケースもある。なお、シナノザサには、クマイザサという標準的な和名もあり、クマイザサと表記されることが多いが、本報ではシナノザサの和名を使用することとした。

結果と考察

ルート 1 の調査区では、22 か所、ルート 2 では 21 か所を調査したところ、この地域の低標高域のササ類相は、ほぼチマキザサ節の種のみで構成されていると推定され、それぞれの調査区で 3 種ずつを確認した。その中でもシナノザサが多数を占めていた（表 1）。一部の群落では、他種と隣接または混生する場所も確認した。しかし、多くの場合チマキザサ節の同一種のものが高く連続して分布していた。また、異なる群落間で、同一種と同定可能な場合でも、植物体の一部または複数の部位において、様々な程度での変異を含む場合が認められ



図 1. 調査地域図

* 三樹 和博 神奈川県相模原市 takachan@vega.ocn.ne.jp

表 1. 分布確認種

調査区	確認種	確認地点
ルート1	シナノザサ <i>Sasa senanensis</i> Rehder	17
	オオバザサ <i>Sasa megalophylla</i> Makino et Uchida	3
	オオササ <i>Sasa veitchii</i> Rehder var. <i>grandifolia</i> Sad.suzuki	2
ルート2	シナノザサ <i>Sasa senanensis</i> Rehder	16
	チマキザサ <i>Sasa palmata</i> Nakai	3
	オオバザサ <i>Sasa megalophylla</i> Makino et Uchida	2

た。肩毛や各部に付属する毛は、時期や環境により失われることがあるが、環境条件の類似した同種の群落間で比較しても、葉裏の毛については、その濃淡にかなりのバリエーションが認められた。他に、葉身の形状に関して、例えばシナノザサには、葉の幅が広いという点で異なる変種としてミナカミザサ *S. senanensis* (Franch. et Sav.) Rehder var. *harai* (Nakai) Sad.Suzuki が分類される場合があるが（鈴木 1997）、チマキザサにも葉の幅の広いものが出現することがあり、葉の形状を一部の種に固有な形質とは考えにくい。

これらの形質以外にも、比較的良好に見られる変異として葉身の捩じれがある。本調査においても、シナノザサ群落の一部で確認した（図 2）。葉が捩じれる状態を、特有の形質として挙げている種として、アズマザサ属のスエコザサ *Sasaella ramose* Makino var. *swekoana* Sad.Suzuki や、メダケ属のタイミンチク *Pleiblastus gramineus* Nakai などがあるが（鈴木 1997, 小林 2017）、他種においても、同様の変異を有する個体に出会う場合も少なくない。また、ササ類が示す本質的な変異以外に、攪乱や環境圧に対して可塑性の高い植物でもあるために、生育地の条件に応じて、植物体の各部位に変異を示す個体が現れることもある。

以上のような、ササ類の種内で見られる変異と、明らかな分類形質との誤認を避けるためには、ある分類群において固有的に見える形質についても、遺伝情報などが得られればそれらも利用し、分類形質としての妥当性の検証を行う必要がある。

白馬村内の山麓部から林道沿いに分布するササ類を調べた結果では、シナノザサなどチマキザサ節の種が、標高 800 m 台までの標高域にある林縁から、上層の鬱閉度の低い林内にかけて生育していた。それより標高が高まるにつれてオクヤマザサ *S. cernua* Makino の割合が増していく。オクヤマザサは、チシマザサ *S. kurilensis* Makino et Shibata とチマキザサ節の種を両親種として、浸透交雑の結果生まれたものであると推定されるため（*S. kurilensis*-*S.*



図 2. 捩じれた葉身

senanensis complex)、産地ごとの変異が大きく、環境耐性が高いため幅広い条件下での分布が見られる（小林 2017）。そして、標高 1100 m を越える辺りからはチシマザサがブナなどの林床斜面に散生するようになるが、集中した群落は猿倉荘までの標高では見られなかった。

本調査で調査対象地域とした長野県北西部の大町市北部から白馬村にかけての地域は、ササ類相の上でも、日本海型の傾向を色濃く表したエリアであることが推測された。

謝辞

大町山岳博物館の千葉悟志氏には本調査の該当地域に関する地史、フロラ情報をご教示頂きました。

引用文献

- 小林幹夫(2017)日本のタケ亜科植物. 北隆館. 東京.
 三樹和博(2017)長野県ササ類地図(3) 御嶽山周辺のササ類相. 長野県植物研究会誌 50: 83-85.
 清水建美監修(1997)長野県植物誌. 信濃毎日新聞社. 長野.
 鈴木貞雄(1997)日本タケ科植物図鑑. 聚海書林. 千葉.